

信州の里山と野生動植物

動植物分野コアメンバー 大塚 孝一・堀田 昌伸

現在、里山にすむ生きものたちが危機に直面しています。これまでは開発による生息地の破壊などの危機が大きく取り上げられてきましたが、最近はそのだけではありません。意外に思われるかもしれませんが、わが国の「新・生物多様性国家戦略(2002)」でも指摘されているように、里山の自然に人が干渉しなくなった、あるいは手を入れなくなったことが大きな問題になっています。そのことにより、キキョウやオミナエシといった、人の暮らしと関わりが深く、以前は里山に普通に見られた植物が急速に衰退しています。現在、信州の里山で数の減少が心配されている希少植物は105科405種にも及び、これは奥山などを含めた長野県全体の絶滅危惧植物790種の51%にあたります。また、動物でも、ハナバチを例にとると、信州の里山はウスリーマルハナバチやホンシュウハイイロマルハナバチなど北方系遺存種の生息地として重要であることが指摘されています。里山における草地や林地の手入れ不足や管理停止による植生の変化は、多くの動物たちにとって絶滅の心配をもたらす要因として考えられています。



オミナエシ

里山では、二次林や植林地、草原や農耕地という様々な土地利用形態がモザイク状に配置されており、それらをつくる林縁や岸辺などの境界線は生物の多様性の維持にとって重要とされています。しかし、そのようなモザイク状の土地利用は経営効率からすると不利な面があるため耕作放棄がすすみつつあります。その代表的な場所として、谷沿いに小規模に続く水田(谷津田)や畑などがあげられます。そして、そこを生活の場としてきたサシバと呼ばれる猛禽(ワシやタカのなかま)などの生物は大きな影響を受けています。

また、里山の手入れ不足により、山にやぶや茂みが多くなり、人里にまで林が接近する状況を生み出しました。それにより、クマやサルなど野生動物が人里に出没するようになり、農林業被害や人身被害が増えて大きな社会問題になっています。一方で、これら野生動物の保護・保全の観点も必要であり、人と野生動物の軋轢を回避するための方策が検討されています。報告書には、これらの野生動物たちの具体的な調査記録がまとめられています。



谷津田環境の猛禽類、サシバ



クララに来たウスリーマルハナバチ



レンゲツツジやズミなどが繁茂する霧ヶ峰の草原も信州の里山

里山と人の暮らし

人文社会分野コアメンバー 畑中健一郎・浦山 佳恵

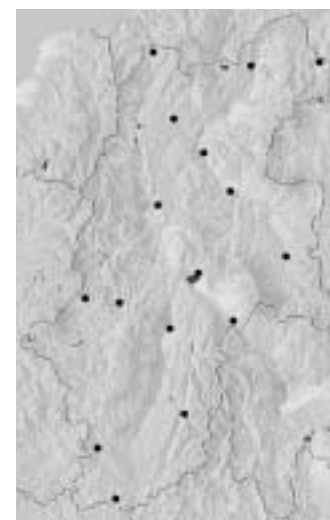
戦前の信州の里山での暮らしをたずねてみると

県内16地域で暮らす60代以上のお年寄りの方々を対象に、かつての暮らしの体験をお聞きしました。

戦前の信州では、生活のための仕事の中心は、稲作と養蚕にありました。その他にもそれぞれの地域で馬や牛の飼育、麦や雑穀の生産、麻など商品作物の生産や中小家畜の飼育、炭焼き、出稼ぎなどを様々に組み合わせて生活していました。全体的には山間の地域ほど、より多くの種類の仕事の組み合わせが認められる傾向がありました。

子どもたちの暮らしぶりでは、大人の手伝いをよくしていて、手伝いの合間に遊んでいました。竹馬や棒ベース、水遊び、スキーやスケートなどや、おやつやおかずの採取を兼ねたグミとり、魚とりや蜂追いなど、まわりの自然や身近にある簡単な物を利用して遊び、遊び道具も自分たちで工夫して作っていました。

食べ物は、白米や、白米に麦や雑穀や野菜を混ぜたもの、あるいはうどんやおやきや蕎麦などの粉ものが中心でした。それに漬物や乾物、さらに川魚やタニシ、ジバチなどの昆虫や小動物などを加えた食事が普通で、身近に存在する食材を最大限に活用し、質素ではあっても各地域で特徴のある食事がなされていました。



県内16箇所の調査地点

かつての持続的な資源利用の様子

1950年頃、里山の資源を暮らしにどのように利用していたのかを知るために、中条村で聞き取り調査を実施しました。

当期中条村では、食べ物以外にも暮らしに必要な物資の多くを里山に依存していました。炊事や風呂の燃料には雑木林の薪や落葉を使い、多くの家で飼育していた馬や牛の餌として採草地などで刈り取った草を与えました。また馬や牛に踏ませた草は厩肥にして田畑の肥料とし、

水田には畦畔の草を田植え前に敷き込んで肥料としました。その他にも、屋根葺き材や履物の材料なども周辺の里山から得ていました。

このように里山から多くの資源を得ており、直接肥料とするもの以外にも、燃料として使った後の灰を雪消しや肥料として利用するなどして、有機物のほとんどは最終的には農地に返し、資源を合理的かつ循環的に利用していました。

里山の土地利用の変化を追ってみると

1960年以降の県内の市町村の土地利用変化をみると、ほとんどの市町村で農地面積が減少していました。さらに、人口の減少がはげしい市町村ほど、農地の減少もいちじるしい傾向がありました。また都市の例として取り上げた長野市では、農地や林地であったところが住宅用地などの都市的土地利用に変化するところが多くなりました。それにたいして中山間地域の例として取り上げた中条村では、農地であったところが都市的土地利用への変化ではなく、森林へと変化していました。戦後の経済成長にともなって、勤めに出るなどの理由で耕作を止めた場合、かつては耕作休止後に植林することも多くありましたが、最近では植林せずにそのまま耕作放棄地として荒地化することが多く、それらの土地が森林へと変わりつつあるという状況がわかりました。

県内の里山では過疎化や高齢化が進む地域も多く、耕作放棄地の拡大や、森林の手入れ不足などの問題が各地で生じています。しかしその一方では、現在でも多くの農家で資源を有効に利用するための工夫が残っていたり、地域に独特な食べ物や年中行事などがあったり、かつての里山の暮らしが少しずつ形を変えながらも各地に残っています。



地域の食べ物をいただきながらの調査(中条村)

里山環境の保全のために（里山研究プロジェクトからの提言）

信州の里山の価値はどこにある？

満20歳以上の2,000人の県民の方々を対象にアンケート調査を行なったところ、回答をいただいた方の約80%の人が里山での暮らしに「魅力を感じる」という結果で、一番の理由としては、「自然が豊か」であることをあげていました。そこで里山の豊かさや価値がどういう点にあるのかを、プロジェクトの調査結果から要約してみました。すると以下のように自然ばかりではなく文化も含めた信州の里山の価値が明らかになってきました。

信州の里山の価値

- 奥山から低地までが凝縮された、独特の景観があること
- 全国的に特筆される野生生物の多様性を備えていること
- 山間地の地形や環境を巧みに利用してきた地域文化が伝承されていること

これら3つの価値は、どれもが地域の歴史遺産であるという点が重要です。つまり、今日の里山の価値や魅力の多くは、地域に生きる人々のかつての暮らしによって築かれてきたものであり、かつての暮らしの名残や習慣と、そこに住む人々の記憶によってかろうじて支えられているのが現在の状況といえます。

どうすれば守られるか？

< 里山の野生生物をまもるには...環境教育への期待 >

里山の野生生物の危機には、草地や林地の手入れが出来なくなったことによる自然の移り変わり(遷移)による影響が大きいことがわかっています。したがって、条例等による開発規制や乱獲防止対策による保護とはべつに、積極的に手を入れるための工夫が必要です。それには、これまで里山であまり意識されてこなかった「生物多様性の保全」という目標をはっきりと掲げた自然への働きかけの重要性を、多くの人に伝えてゆくことが大切です。

身近な植物とそこに集まる動物のことやその生息環境の変化などについて、より多くの人に関心を払うこと、そして生き物の生態を学び、保護のためにも考え、それぞれが自分から出来ることをやってゆく環境教育の重要性がとても大きいといえます。

< 野生動物との共存をはかるには...人々の連携のもとに >

最近、クマなどの野生動物による農林業や人身被害が問題になっています。人と野生動物との共存をはかるためには、行政や農林業の従事者、土地所有者など、立場の異なる多くの人の連携によって以下の方策を一体的にすすめることが重要です。

- 人と大型野生動物の活動域が重複しないように、活動域のゾーニングをはかること
- 動物を人里や畑に誘引しないための工夫
- 山間地の奥にある針葉樹主体の植林地の広葉樹林への転換促進(長期目標)

< 里山の暮らしと文化をまもるために...記憶と技術の継承 >

地域に住む人が安心して暮らすためには、地域に根ざした産業である農林業を今後も維持し発展させてゆくことがまず必要です。それには、生産品のコスト競争ばかりではなく、生産活動が地域の環境保全と暮らしの質の向上に果たす役割をきちんと評価し、地域が一体となって健全な農林業を支えてゆくような環境づくりが必要です。また里山を持続的に活用するための方策を、そこに住む人たちが知恵を持ち寄って生み出していくことも欠かせません。そのためには、まず地域をよく知ること、そのための郷土学習や自然体験、都市と農村との交流促進が大きな力になると考えます。その取り組みのなかで、とくに食文化やささまざまな生活の知恵など、かつての里山の様子を知る地域のお年寄りの経験を次世代に伝える仕事は急ぐ必要があります。そのような取り組みができるのは、おそらく今が残された最後のチャンスであり、近い将来には不可能になるおそれがあります。

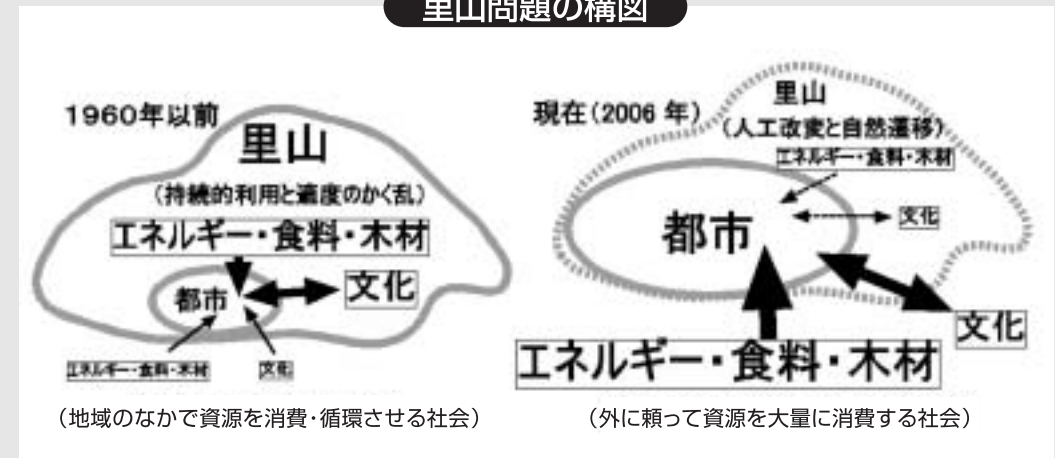
課題克服のための5つのキーワード

以上の課題を克服するために、里山研究プロジェクトでは、以下の5つのキーワードを掲げました。

1つ 地産地消の推進

里山問題につながる環境変化の根本には、次頁に示すような構図があります。

里山問題の構図



この構図に示されるような現在のエネルギーや食材、木材資源等の大きな流れと、都市と里山との関係を見直さないかぎり、実は里山問題の根本解決はできません。まず地産地消の推進などにより、地域内での食料や林産資源の自給率を少しづつでも上げてゆくことが、重要な方策のひとつといえます。

2つ 里山をもっと知ること(「地元学」あるいは「足元学」のススメ)

里山にはまだまだ知られていないさまざまな価値や魅力がありますが、それらが1960年代以降の環境変化のなかで日常生活に埋没し、風化・変質しつつあります。この40~50年間の過去に類をみない環境変化の実態や、守るべき価値への理解がないままでは、とうてい保全はできません。いまこそ、郷土の自然と文化を体験し、その価値を多くの人々が共有することが必要です。

3つ 里山保全の担い手確保

これからの里山保全は、土地の所有者ばかりではなく、様々な立場の活動主体の力を必要とします。そのためにも、異なる主体それぞれの意識に応じたきめ細かな情報提供の仕方や連携の仕組みを考える必要があります。情報提供では、たとえば以下のような配慮が必要です。

- ・里山に関心が高い人(高齢者に多い)向けには多様な里山活動メニューの整備
- ・里山に関心が低い人(若年層に多い)向けには里山の魅力に関する基本的な情報提供
- ・農林業従事者へは、環境保全への期待と支援策を盛り込んだメッセージや情報の提供
- ・里山と里山保全に関する学術的な調査研究の推進とその情報発信

4つ 新たな発想による里山保全

従来の農林業以外の新たな発想による里山の利用と整備の推進が必要です。たとえば里山に暮らす特徴的な生き物に焦点をあて、里山に手を入れることによって、その生き物たちの様子がどのように変わってゆくのかを楽しむながら観察していく、そういう里山利用の事例があります。また、新たなトレッキングルートを開拓しつつ、地域の自然や文化の保全をはかり、地域の活力の向上を目指す活動などもあります。そういった活動をすすめるためには、お互いの責任や利用制限などに関して、土地の所有者と利用者の間での柔軟なルールづくりを行う必要があります。

5つ エネルギー資源供給地としての可能性

かつて里山で採取されていた生物資源が、バイオマス(生物由来の資源)という再生可能な新エネルギーのひとつとして脚光を浴びつつあります。今後里山が木質バイオマスエネルギーの供給地として利用され、新たな雇用が生み出される可能性があり、利用推進のための一層の研究が必要です。

おわりに

里山の環境保全には、人々の合意による地域力の結集が求められます。変貌をつづける現代の社会環境と自然環境のなかで、本当の安心と安全のある暮らしとはどういふものなのか、環境という幅広い視野から私たち一人一人が自分自身の生き方そのものを模索し、実践してゆくことが求められています。